
俺の高校生活

すぴか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の高校生活

【Nコード】

N8981C

【作者名】

すぴか

【あらすじ】

自称、普通の高校生を描いたラブコメ。しかし、彼は恋愛などに興味はなく、未だに彼女はいない……。「あゝあ。俺って本当に彼女欲しいのかなあ……。」

第一話（前書き）

初めて小説を書いてみました。いろいろと変な文章があると思いますが、よろしくお願いします。

第一話

「コラッ！ー！今日行けば明日から夏休みなんだからしっかりしなさい。」

俺の母親が怒鳴る。

「ハイハイ。行ってきまゝす。」俺は軽く流しつつも焦って自転車をとばす。

そうして今日もまた俺の一日が始まった。

ガラガラ

「今日も遅かったな。」

少し笑いながら俺の親友の金田宏昭は言った。

紹介が遅れたが、俺の名前は井出裕章だ。私立星海学園の高等部で、どこにでもいそうな普通の高校一年だ。また偶然にも漢字は違いが同じ名前の金田宏昭は中部からの親友で、いつも一緒に行動してる。でもコイツはイケメンだから結構モテてるけど。

「ああ、いつものことだろ。」

テンション低めに俺は言う。

「テンション低いのもいつも通りだな。相変わらず変わってるよな。井出はさ。」

「そうか？普通だろ。」

そして俺が話題を変えようとすると……

「オイ。終業式始まるからさっさと体育館に集合だ。」

「は~~~~い」

そして俺らは終業式を終え、すぐにみんな帰り始めた。

もちろん俺も荷物をまとめる。

「オ〜イ。金田。帰ろ……………」

俺が言い終わる前に教室の扉が開いた。

「井出先輩ですよね。」

「??」

そこには俺の名前を知っている女子と、その子のことを見たこともない俺がいた。

金田が小声で言う

「誰?この子?」

「知らん。」

そして俺は目の前の少女に言う。

「誰?アンタ?」

俺は結構人見知りが激しいので、初めて話す人にはかなり冷たい態度をとる。別に自分ではそんなつもりないんだが……………。ただ、自分を弁護しとくと、俺は慣れた人とはよく話すのだ。だから友達の間ではよく笑いなどをとっている。

俺の冷たい態度に少女はちょっとうつむいてしまった。

クラスの女子が

「ヒド〜イ」などと言っているが、ウチのクラスの女子はほとんど

がブサイクなので、俺は全く気にしない。

「……………」

そうは言っても対応に困っていると、急に少女が笑って顔を上げた。

第二話

「先輩のメールアドレス教えて下さいっ！」

「……………」

なんなんだ、急に……………」

俺の後ろでは金田の笑い声が微かに聞こえる。

「ああ、悪いけど俺って自分のアドレスとか覚えてないんだよね。」

これは事実だ。いたずらメールが嫌で自分でも覚えられないアドレスにしたのだ。しかもウチの学校は携帯を持って来るのは禁止だ。

しかし、目の前の少女はまたにつこりとしていた。

「実は前に他の先輩に聞いたので、もう知ってるんですよ。今日はそのことの許可だろうと思っただけで……………」

とんでもないことを言い出した。そんなすぐに教えられたら俺が分りにくいアドレスにした意味がない。てか、俺に許可なく教えた奴誰だ。

「じゃあ今日メール送りますね。あっ！それと私、中三の中山佐紀っています。」

そうして、俺の返答も聞かずに中山佐紀は教室から去っていった。

「いいなあ……。あの子絶対お前に惚れてるぜ。」

自転車を押して、歩いて金田と帰ってたら、急にそんなことを言い

出した。

「んなわけねえだろ。」

そう言いつつ内心ちよつと期待してた。

「なあ、井出。あの子に中三のカワイイ子を紹介してもらってよ。」

「ふざけんなよ。俺がそんなこと出来るかよ。」

「あゝあ。カワイイ彼女欲しいなあ。」「そうか？」

何のために彼女欲しいんだろ……。俺も昔彼女がいた。確かに一緒にいて楽しかった。でも一緒にいて楽しかっただけに、別れた時に本当に辛かった。彼女の浮気が原因だったけど、俺はあるとき本当にアイツのことが好きで……。

「あゝあ。俺って本当に彼女欲しいのかなあ……。」「

なんとなく、自分に言ってみる。

「なんだ、それ。」

金田は笑って答えてくれた。

「キヤー!!」

そんな時、悲鳴が聞こえた。

「なんだ!？」

俺と金田は急いで声のする方へと、走った。

「うう……。助けてくれ……。」「目の前には中学生らしき男が三人倒れている。

俺がやったわけじゃない。金田だ。こんなとき、コイツは本当にかっこいいよなと思う。

「大丈夫か？」

金田が女の子に声をかける。女の子にケガはないようだが、恐怖からか、微妙に震えていた。

「……ありがとう。」

女の子が顔を上げてドキツとした。同じクラスの山下愛理だった。以前から笑顔がカワイイな、と思ってて、俺もよく話してたので少し好意は持っていた。

「ワリイ、井出。俺、山下家まで送って行ってやるよ。」

「ああ。そうしてやれよ。」

「……ゴメンね。金田君。」

そうして俺は二人と別れた。

家に帰ると、すぐに金田から電話がかかってきた。

「帰り道に山下に告白された。だから、付き合うことにしたよ。結構カワイイしな。」

「オオ。良かったじゃん。明日から夏休みだし、たっぷり遊べるな。」

「まあな。じゃ、またな。」ガチャン

なんだか分からないけど、心が重く感じた。今さらだけど、俺山下に好意とかじゃなくて、本当に好きだったのかな……。

それはない！

そう自分に言い聞かした。仮に好きだったとしても、告白したり、金田に相談したりしなかったのだ。なにより好きだという気持ちにすら気付かなかった……。

ショックを受けてベットに飛込んだ俺の横で、携帯はメールを受信した。でも、それに気づかないくらい俺はショックだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981c/>

俺の高校生活

2010年12月10日19時37分発行